

海と山の恵みを生かす 私達の漁村づくり
—— 過疎と高齢化に立ち向かう婦人部活動 ——

大社町漁協婦人部
婦人部長 田中 田鶴子

1. 地域の概況

大社町は、島根半島の突端に位置し日本海に面する町で、縁結びの神様で有名な出雲大社の膝元にある。町の産業は、漁業の他にデラウエアブドウを中心とした農業、出雲大社や風光明媚な日御碕の観光に関連するものが主な産業である。最近、出雲大社では、歴史的に貴重な発見と話題になった本殿柱跡が発掘されて脚光を浴びている。

人口は現在、約1万6600人で、年々高齢化しつつある。

2. 漁業の概要

漁業の職種は、定置網、刺し網、一本釣り、小型底引き網、採貝藻と多種多様である。

採貝藻では、岩のりとわかめが有名で、特に板状に乾燥させたわかめは「板わかめ」と言い、出雲地方ならではの食材として親しまれており、またおみやげ品にもなっている。現在、板わかめの製造は、天然わかめを原料にして、女性と高齢者によって手作業で製造している。

大社町漁協は、昭和36年2月、合併により発足し、現在、組合員は約600人、昨年度の水揚げ量は1000トン余り、総収入が約6億円と、残念ながら年々減少している。

3. 研究グループの組織と運営

私達の大社町漁協婦人部は、昭和36年7月に町内の4地区が合併して発足し、部員数は現在188名である。また、昭和49年には大社町に隣接する1市2町の漁協婦人部と簸川平田地区漁協婦人部連絡協議会を結成し、各婦人部に共通する課題解決のための研修会や親睦と連携を深めるための活動を行っている。また、農協女性部や生活改善グループ等の農業女性とも連携して、平成9年に簸川地方農林漁家女性組織連絡協議会に参加し、さまざまな女性組織とのネットワークを広げ、自分たちの活動に反映させている。

私達婦人部は、地区単位の活動と町全体の活動を行っており、町全体の活動としては、石鮎作りや河川の水質調査、浜の一斉清掃、イベントでの魚食普及等を行っている。浜の清掃やイベント参加時の荷物運搬などは、各会員の家族、特に夫の協力を得て男女共同参画で実施している。本日は私の住む鵜峠地区における活動を中心に紹介したい。

4. 実践活動課題選定の動機

私の住む鵜峠地区は、大社町の中心部から険しい山道を日本海側に越えた所にあり、古くから漁業を生業とした地区である。世帯数は現在、56戸、人口87名で、地区が最も賑わった時代に比べると世帯数は半分に減少した。零細な漁業と生活条件の厳しいこの地区では、漁業の後継者は勿論のこと、各家の後継者も地区外で生活する人が多くなり、現

在、地区の高齢化率は68%と県内一の高齢地区となっている。そのため、漁協婦人部としても高齢化に対応した活動に重点を置いている。

5. 実践活動状況及び成果

町の中心部から遠い当地区は、民家が密集し、道幅は狭くて入り組んだ所が多い。万一、急病人が出たり、また火事が発生した場合、初期の対応は地区住民が敏捷に行わなければならない。

数年前のこと。一人暮らしの高齢者の家の様子がいつもと違うので、様子を見に入ったところ、高齢者が家の中で倒れておられるのを発見。すぐに救急車を手配し、幸い一命はとりとめた。しかし、後遺症で不自由な身体になられ、一人暮らしができなくなったため、息子さんのいる他地区へ引っ越されたということがあった。この時、もっと早く発見し、応急処置ができていたならば、不自由な身体になられなくてもよかったのに・・・という思いがした。そして、「ここでずっと暮らしたかったな・・・」という高齢者の言葉が今も耳を離れない。

こういう出来事がきっかけとなって、私達は自治会や行政とも連携しながら、応急処置の勉強や一人暮らしの高齢者への声かけ運動等の自主的な活動をスタートさせた。

まず一つとして、海の事故や急病人の発生を想定して、救急処置方法の講習会を実施している。呼吸が停止して4分間が蘇生の分かれ目である。受講者は人工呼吸の手順とポイントを身につけようと熱心に勉強している。現在は、女性だけが受講しているが、命にかかわることなので、男女を問わず全住民が習得されるよう今後も関係機関に働きかけて継続したい活動の一つである。

二つ目は、一人暮らしの高齢者への声かけ運動である。地区内では現在、1/3の世帯が高齢者の一人暮らしであるため、誰もが一人暮らしの高齢者へ声をかけるように心がけている。例えば、一人暮らしの〇〇さんの家のカーテンが朝になっても閉まったままの時は、「〇〇さん、まめなかねえ。どげしとらっしゃら？」というように、声をかけ、返事がなければ近所の人と一緒にその家に入って確かめるといような活動である。

三つめは、ミニデイサービスへの支援活動である。この活動では、特に精神面のケアとして、高齢者が明るい気分になるよう、「大声で笑うこと」に力を入れている。参加した高齢者の表情が明るくなっていくのが何よりも嬉しいひとときである。

四つめは、住民が自らが健康管理するよう、行政に働きかけて定期的な健康診断を実施し、検診日には検診のお手伝いをしている。救急車の出動要請がない地域を目指して、一人でも受診もれがないよう目配りしている。

五つめは、地域内にオープンした宿泊・交流施設「夢の森うさぎ」での活動である。この施設は、高齢化した地区を何とか活性化させたいという意見が盛り上がり、町の支援もあって平成9年に開設した体験型の施設である。運営は地区住民に任されており、婦人部は、海辺の小学生と山間部の小学生の交流会のお世話を行うなど、高齢者だけでなく若い人達とも関わり合いながら活動を行っている。

6. 今後の課題

残された課題としては、元気な高齢者の知恵や技の活用を図っていくことである。中で

も、地域に残っている伝統の「板わかめ」や「岩のり」、「あらめ」などの加工品は、高齢者の経験と技術が生み出した特産品であり、加工作業は高齢者の生きがいになっている。

「板わかめ」は、一枚一枚のミスに生わかめを手で広げていく手間のかかる作業であるが、手仕事ならではの丁寧な作業で美味しい「板わかめ」が仕上がる。高齢者の知恵と技を活用したこれらの特産品を絶やすことなく、大切に継承していくことも私達の義務であると思う。

二つ目の課題としては、「夢の森うさぎ」へもっとたくさんのお客さんが来てくれるよう、女性ならではの感性を生かした活動で協力していきたいと思う。

私達人類の「生命」の源である海。生活の糧としての漁業、観光や消費者交流の核となる海。このように私達は、海からさまざまな恵みを受けている。これからも、恵み豊かな海を大切に、そして感謝を忘れず、いきいきと輝く漁村づくりに励みたいと思う。